

〔新刊紹介〕

津軽歴史代記類

小籠 衷三

青森県文化財保護協会の継続事業である「まちのく双書」第七、八集として、五集の「津軽藩旧記伝類」に引き続いて「津軽厂代記類」が昨年刊行されたが、郷土史研究の史料として「旧記伝類」と共に非常に有益なので紹介する次第である。「厂代記類」「旧記伝類」とその母体である「津軽旧記類」に關する経緯は本誌十三号に「旧記伝類」を紹介された、若狭守七郎氏が懇切丁寧に述べられているので、私は再言することを避け、次の二点を取りあげたい。

- 1、引用史料に關して
- 2、題名に關して

(1) 上下、七〇〇頁に及び此の書はそれだけ引用史料も多く、多数引用したものは別表のようであるが、約一〇〇。余に及び。刊行委員成田末五郎氏の解説に「此の本は編者等が一人その出所を明記し、信するに足るものを選取してあげたものと思われるから津軽史の根本史料といつてよい。殊に津軽の旧記類は昔から度々災厄を受け、甚だ少い中に明治の初期にこれだけ収録してくれたことはまことに貴重な業績を遺されたものといわねばならない。」と述べているように、現在、原本が存在しないものもあるが、此の後の二大編集とも云うべき、津軽史（明治レ大正、長沢徳右衛内、県立図書館蔵）、青森県史（大正末）と共に郷土史研究に根柢を与えてくれている。

別表は引用頻度の多い約二〇を以て、大別すれば、
① 厂代を以て引用しているもの
② 厂代家譜、工藤家記（封内事変他死）、佐藤家記、津軽藩日記
③ 或る時期だけ引用しているもの
津軽記、奥國土物語、齊藤長門日記、無超記、梅田日記、長尾周磨家記、小山内

江戸時代藩三代数	引用史料 厂代藩主	(イ)				(ロ)						(ハ)						
		厂代家譜	工藤家記	佐藤家記	津軽藩日記	津軽記	奥富士物語	齊藤長門旧記	無起記	長尾周庸家記	小山内又右衛門家記	神七五郎筆記	楠美氏明治日記	草堂記事	下沢氏抄	藤田氏抄	老譚	津軽家文書
	信	2				3												
	政	2				2												
1	信	12	1	4		40												2
2	信	3	42	10		7												4
3	信	2	31	35														4
4	信	2	186	58	68		16	5									5	6
5	信	3	77	20	18		1							2			2	5
6	信	2	35	11	20									3				
7	信	2	97	55	57			4						2			2	
8	信	2	32	60	30				28					2	6		17	
9	信	2	154	120	140			12						6	14			
10	信	1	19	67	63									3	10			
11	信	2	40	14	94					88	58	8		3	6	3		
12	信	1			243					72	14	77	176	15	13	4		

又右衛門家記、神七五郎筆記、前田正文
 筆記、楠美氏明治日記、草堂記事等
 (ハ) 编者達の筆記、その他
 となる。

(イ) の工藤家記は「封内事実秘死」(弘前図書館蔵岩見支庫)として、藩政諸般に關係ある古記をよく収めて居り、次に述べる「佐藤家記」が現存しない奥かめしても貴重なものである。

工藤家記とならんで「厂代記類、旧記伝類」「泉史」等に多く引用されている「佐藤家記」は一体いかなるものか。私の微力を調査では不明であるが、成田末五郎氏も、二、三の心当りはあるが断言できるものは見当らないとされている。編集當時はあつたのだし、今後の究明にまづより致仕方がない。

津軽藩日記に關しては、既に本誌創刊号に千葉良一代が紹介しているが、信政時代(寛文元年、一六六一)にはじめられ、明治維新まで続いた最も重要な史料であり、極く少数の欠本はあるが、御国日記二九七四冊、江戸日記二七二冊、計四

二四六冊が弘前図書館に保存されていることは喜
びにたえない。

(四)或る時期だけ引用のものとしては各家由緒書、
家記があり、草創期に功のあつた各家の祖先達と
藩主とのつながりの点からとりあはれられている。

まごまごしたものとしては、草創期から信長まで
の向に多く引用されている石井三掩著と云われる
津軽記(文部省史料館蔵)があり、信政時代には
奥富士物語(青森県叢書第八、九編)があり、信
明時代には無超記がある。

幕末から明治にかけては、各個人の日記類が多
く、現存しておつたため正確さも充分信頼できる。
(ハ)編者(下沢氏、藤田氏等)の筆記抄、老譚等
があり、現在文部省史料館蔵となつている津軽家
文書は、江戸の津軽家にあつたもので編者達が拜
借使用したものと想う。

次に「津軽一統志」と「永禄日記」が引用され
ていないのは何故であろうか。

「一統志」(青森県叢書第六編)自体、古書、
由緒書を集めたものとするは、原本にあつたた

め、「一統志」として出てこなかつたようであり、
「工藤家記」も「一統志」から抄出している点か
らもそう考えられる。「永禄日記」(両方のく双
書寮一集、本誌十四号に荒井清明氏紹介)は北畠
氏の記録であり、又民間記録であつたためか、「
梅田日記」として散見している程度である。

以上のように、引用史料は藩内のものばかりで
あるが、「太田南畝一話一言」(蜀山人)から、
「延宝七年四月、津軽の浦人、龜を助けしに、
其恩にとて卜壇を与へたり。領主へ上りけるに、
目方十八匁あり、五匁を分て残りハ、百姓へ返
す。是寿命延年の憑なりと云。此事達上聞上覽
有之返し給ふ。」
などの引用はめづかしい。

(二)次に題名、「津軽厂代記類」であるが、津軽
厂代として「旧記類」から厂代藩主関係を整理抜
書したのであるが、政信を津軽の始祖としている
点を少し考えてみたい。

母体である「旧記類」から、秀栄―盛信を何故

除いたか。大浦（津軽）へ進出した政信の祖父光信（長勝公）からの教えないのか。津軽の用発、発展が政信の時から急に進んだとも云えない。

次の引用にあるように、藤原氏との関係を重視して政信を始祖としたのであろうか。

嘉永三年九月十五日、御家老大道寺旅之助、

近衛殿へ御使者被仰付、江戸表出発於京都左之御書頂戴之上、十二月二十三日江戸表へ到着。

津軽家始祖、政信者、実け後の法成寺到白

尚通之庶子也。而旧来杯猶子有其子細、寛永

中岡白信尋之消息書、爲猶子、之政中尋之文

書亦随先蹤而記、猶子盖先代爵没位之向懼於

妹、当家庶子而、相承知、是耳至右京大夫、

寧親者勲功之間、累進官祿、是其家之眉目子

孫之光輝也。今越中守順承者、始爲分地甲斐

守親足、養子後、入爲嫡家、出羽守信順、養

子能継父祖業、藩屏國家撫育民、是以采有御

嗣求、父祖血脉之人、幸寧親之東家爲始祖血

統、又以有男子、相謀取爲養子杯武之助、承

祐、順承之能、忠能、考光於先烈可不嘉尚哉

且对当家、被存由緒之策、深所感也。今度柳宮有詳審諸家系譜之幸而、津軽家既爲列國、何所憚而得不以実、申告故、予令順承以始祖政信、実爲尚通庶子改署於譜進之以贊成順承順承孝參之美焉、此趣遺子孫。爲令知意漆、此一書者也。

嘉永三年十一月 右大臣忠熙

（津軽藩日記）

（本書下卷一五一頁）

津軽氏と藤原氏との関係は明治になつてからも問題になり、下矢氏と修史局の向はどつとめした書面も津軽家文書に残っている。

本書は上下、七〇〇頁にわたる大部なものであるが「旧記類」の余葉―盛信の部を附録とでもして付け加えたならば一層便利であつたと思われる。ともあれ、正編とも云うべき本書、続編とも云うべき「旧記類」の刊行は今後郷土史研究に多大の利を与えてくれることになり感謝にたえない。

（青森県文化財保護協会刊 A5判

上巻一九四頁、下巻三九六頁）